学びや タイムスリップ

㉟ 京都の大正自由教育 （明治・大正時代）

児童文庫や新聞を活用

近年、NIE（Newspaper in Education）、すなわち「教育に新聞を」という考え方が注目されています。しかし、その起源が実は100年ほど前にあることは、あまり知られていません。

当時の日本は大正時代。小学校への通学率がようやく9割を超えたそのころ、後に「大正自由教育」と呼ばれる児童主体・自学重視の教育が広がりました。各地の師範学校附属小（現在の教育大附属小）が発信源となり、主に都市部の小学校で実践されました。その一環で、教育に新聞を活用する試みがなされたのです。

京都では、明治後期から自由教育の兆しが見られます。その先頭を切ったのは生祥尋常小（中京区）の校長岩内誠一で、1902（明治35）年に学区有志者の寄付金をもとに生祥児童文庫を開設しました。

岩内は京都府師範学校出身で、石田梅岩の教育思想を学校教育に活かすことに尽力しました。後に岩内は、児童文庫は「自学自習」のために最も大切だと語っています。

1905（同38）年には、修道尋常小（東山区）の同窓会の尽力により、私立修道児童文庫が全国唯一の公認児童図書館として創設されます。この児童文庫は増築移転の後（写真1）、1911（同44）年に学務委員の協力を得て校長真下瀧吉（真下飛泉）の主導で学校運営となりました。1913（大正2）年の蔵書数1358冊という記録が残っています。

真下は、広く国民に親しまれながらも第2次世界大戦中に軍部に歌うことを禁じられた「戦友」の作詞者として有名ですが、教育者としては府師範学校出身で京都の大正自由教育を先導した一人として知られます。

写真1、修道児童文庫移転増築費寄附簿（1906年）

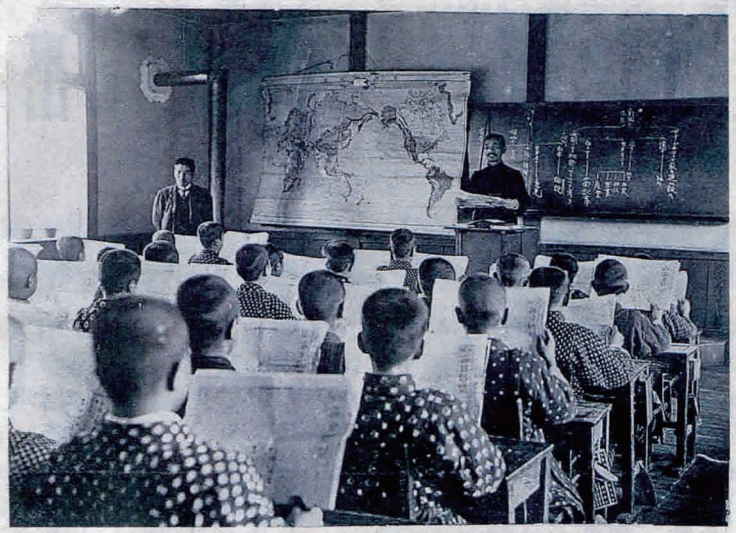

写真2、新聞記事を使った授業（1915年ごろ）

「児童本位」を唱道して進められた学校改革は、校内の教育設備だけでなく、教員の人事や学区の社会教育にまで影響を与えた壮大なものでした。

その中で行われたのが、新聞を活用した授業でした（写真2）。写真中央には授業を担当する教師、左には校長真下の姿が見えます。

（京都市学校歴史博物館学芸員　和崎光太郎）

◇

今回紹介した資料と写真は学校歴史博物館（下京区）で見られます（水曜休館）。